

安居劍太郎「王女の誕生日」

安居劍太郎「王女の誕生日」はこれまでどのワイルド書誌にも紹介されていない文献である。今回この文献の発見と簡単な分析を行うこととする。

(1) 発見の経緯

宝塚歌劇団が大正 3 年（1914）の『ドンブラコ』が上演されて平成 26 年（2014）は 100 年に当たる記念の年となった。筆者自身も研究対象している日本シェイクスピア受容研究のひとつとして宝塚歌劇団のシェイクスピア劇上演に注目していた。その関係から上演記録等の確認を行っていた。特に大正 15 年（1926）3 月に上演された花組による坪内士行編『オフィリヤの死』の調査を行うため、雑誌『歌劇』の調査を行った。『歌劇』は宝塚歌劇団の機関誌で、大正 7 年（1918）に創刊された。今回の調査は『オフィリヤの死』が上演された大正 15 年前後の調査を中心に行い、大正 15 年（1926）1 月の『歌劇』（第 70 号、歌劇発行所）に安居劍太郎「王女の誕生日—童話劇—」として掲載されているのを発見した。

(2) 『歌劇』と安居劍太郎

『歌劇』は前述の通り、宝塚歌劇団の機関誌であり、宝塚歌劇団の上演記録の調査に欠かせない文献のひとつである。当初は季刊発行であったが、ゲ月刊発行へ変わるほど盛況であったと言える。第 70 号に掲載されたものは、小林一三「民衆藝術の内容」、坪内士行「諸藝座の必要」、それに脚本三篇がその中心である。脚本三篇とは以下の通りである。

小野晴通「夢見懺悔品」

堀正旗「お七狂焰」

安居劍太郎「王女の誕生日」

小野晴通、堀正旗は脚本等を担当していようだが、安居劍太郎についてはい

わゆる舞台係であったようだ。大正 15 (1926) の『歌劇』(6月号) に安居 剣太郎「舞台雑談幕合ばなし」が掲載されており、当時の宝塚歌劇団の公演スケジュールがわかる。それによる、1本 30~40分前後、幕間 20分から 25分で 1日 5本立ての公演を行っていたことがわかる。堀正旗は現在では宝塚男子部の数少ない一人でもある。宝塚歌劇団の創始者である小林一三は国民劇が念頭にあったため、1919年(大正8年)、宝塚音楽歌劇学校に選科を設けて第一期と第二期の計 8人の男子生徒を入学させたが、周囲等の反対もあり 10ヶ月後に解散している。第一期には堀正旗、後に新国劇の辰巳柳太郎、藤原歌劇団演出家の青山圭男、第二期には白井鐵造、岸田辰彌がいた。なお、後年、堀も小野も理事・演出を務めている。安居剣太郎についての詳細はわからないが、舞台係を担当しながら、脚本にも取り組んでいたといったところだろうか。

(3) 安居剣太郎「王女の誕生日—童話劇—」

「王女の誕生日」(*The Birthday of the Infanta*)は『柘榴の家』(*The House of Pomegranates*, 1891) に掲載されている短篇である。これまでのワイルド書誌等でも紹介されてこなかった文献である。⁽¹⁾ 大正 15年(1926) 1月に『歌劇』(第 70号、歌劇発行所)に安居剣太郎「王女の誕生日—童話劇—」として掲載された。翻訳、翻案の記述もなく、また、ワイルドの名前も一切記載されていない。まず、ワイルド原作「王女の誕生日」のおもな内容を『オスカー・ワイルド事典』(1997)より紹介しておきたい。

スペインの人工美の宮殿で、優雅で、威厳のある美を与えられた 12歳の王女。自然育ちで粗野、醜い不格好な小人。王女は好奇心を抱き、小人は王女に魅せられる。鏡に映った己の姿から王女の本心を知った小人は悶死する。美(無邪気)の中に醜(残酷)があり、魂の中に優しさ(純真さ)があった。象徴的作品。⁽²⁾

原作と安居脚本との簡単な対比をしておきたい。

オスカー・ワイルド	安居劍太郎
Princess and the Infant	王女
Duchess of Abuguerque	アルベクルク公夫人
the young Count of Tierra-Nueva	テラスバ伯爵
the little Dwarf	一寸法師

ここでは冒頭と結末部分を原文と安居脚本それぞれ紹介しておきたい。

It was the birthday of the Infanta. She was just twelve years of age, and the sun was shining brightly in the gardens of the palace. Although she was a real Princess and the Infanta of Spain, she had only one birthday every year, just like the children of quite poor people, so it was naturally a matter of great importance to the whole country that she should have a really fine day for the occasion. And a really fine day it certainly was. The tall striped tulips stood straight up upon their stalks, like long rows of soldiers, and looked defiantly across the grass at the roses, and said: “We are quite as splendid as you are now.” The purple butterflies fluttered about with gold dust on their wings, visiting each flower in turn; the little lizards crept out of the crevices of the wall, and lay basking in the white glare; and the pomegranates split and cracked with the heat, and showed their bleeding red hearts. Even the pale yellow lemons, that hung in such profusion from the mouldering trellis and along the dim arcades, seemed to have caught a richer colour from the wonderful sunlight, and the magnolia trees opened their great glove-like blossoms of folded ivory, and filled the air with a sweet heavy perfume. ⁽³⁾ (下線部筆者。以降同じ)

家臣 いや實に麗しき天氣ぢやなあ、さても今日こそ姫君の御誕生日でござるわ。さりとは解せぬ姫君はスペインの皇女であり、御姫の宮であるに、一年に二度の誕生日のなきは町の子達と同然ぢや。一が津々浦々は歡び
ことほぎ、太陽は城内隈なく照らすとは。

王女とアルベクルク公夫人登場。

王女 今日は妾の誕生日ぢや。父君、王は私の誕生日を祝ふて下さるかや。

(4)

下線部は特に原文が生かされている部分である。

結末の部分も見ておきたい。

“But why will he not dance again?” asked the Infanta, laughing.
“Because his heart is broken,” answered the Chamberlain. And
the Infanta frowned, and her dainty rose-leaf lips curled in pretty
disdain. “For the future let those who come to play withme have
no hearts,” she cried, and she ran out into the garden. ⁽⁵⁾

王女 踊つてゐる時も可笑しいがかうして寝た姿も格別面白いなう。(一寸法師に) 妾が来たに、何故踊らぬのぢや。

一寸法師は一寸起き直つて王女の衣を、つかむと又ぶつたふれてじつとなる。

テラ (足で一寸法師に觸つて) 踊らぬか、鬼男、踊らぬか。スペインとインと西印度の姫宮が楽しみたいと云はれるぞ。

一寸法師動かない。

家臣 (一寸法師の胸に手をおいたが、女王の方を向いて低頭した後) 美しい姫宮。おなた様のおどけ男は又と踊りは致しままい。

王女 何故ぢや。

家臣 心臓が破裂して居ります。

王女 (無意識に足踏みし頭をかしげ) これからは心臓のない者を踊りに
来させて！ (室の外へ走り出す)。(6)

冒頭と結末を紹介したに過ぎないが、安居は童話を脚本に書き換えた。実際に宝塚歌劇団では『王女の誕生日』は上演されていないようだ。

(4) オペラとバレエ

ワイルドの悲劇『サロメ』は演劇と上演される以上にリヒャルト・ゲオルク・シュトラウス (Richard Georg Strauss, 1864-1949) のオペラとして上演される方が多いことは周知の通りである。『サロメ』は明治 38 年(1905)に作曲されている。「王女の誕生日」について目を向けてみると、アレクサンダー・フォン・チェムリンスキー(Alexander von Zemlinsky, 1871-1942) の『こびと』(Der Zwerg, 1919-1921 作曲、1922 初演)、別名『王女の誕生日』(Der Geburtstag der Infantin)、フランツ・シュレーカー(Franz Schreker, 1878-1934)は明治 38 年 (1905) に『オスカー・ワイルド原作の同名の御伽噺による舞踏音楽「皇女の誕生日」(室内オーケストラ版)』(*Der Geburtstag der Infantin, nach dem gleichnamigen Märchen von Oscar Wilde für Kammerorchester*)、さらに明治 41 年 (1908) のクンストシャウ (Kunstschau) の柿落としのために、パントマイム『皇女の誕生日』(Der Geburtstag der Infantin) を作曲した。その後、管弦楽組曲『皇女の誕生日』(1923)を發表している。平成 13 年(2001)2 月 28 日にチェムリンスキー作曲／大橋マリ構成によるオペラ『王女様の誕生日』(BUNKAMURA オーチャードホール) が上演されている。そのキャストは次の通りである。

沼尻竜典指揮

東京オペラシンガーズ合唱

菅英美子

スペインの王女 ドナ・クラーク ソプラノ

福井敬	小人 テノール
高橋薫子	王女の次女 ギター ソプラノ
成田眞	侍従長 ドン・エステバン バス
五月女智恵	侍女1 ソプラノ
三塚直美	侍女2 ソプラノ
戸畑リオ	侍女3 メゾ・ソプラノ

なお、チェムリンスキーは他にオペラ『フィレンツェの悲劇』(*Florentinische Eine florentainische Tragödie*, 1917) もあり、その日本でのオペラ初演は平成4年(1992)9月18日の東京フィルハーモニー管弦楽団・大野和土指揮(BUNKAMURA オーチャードホール)であった。

注

- (1) 平井博、井村君江の先行研究・書誌にも紹介されていない。また、一連の佐々木隆によるワイルド書誌、『日本ワイルド総覧』(イーコン、2007年2月)、『日本ワイルド総覧(増補版)』(イーコン、2008年2月)、『日本ワイルド研究書誌』(イーコン、2009年2月)、『日本ワイルド研究書誌(増補版)』(イーコン、2014年9月)でも掲載されず、その後の調査で発見したものである。
- (2) 『柘榴の家』(山田勝編『オスカー・ワイルド事典』北星堂書店、1997年10月)、p.550.
- (3) *The Complete Works of Oscar Wilde* (London and Glasgow: Collins, 1990), p.234.
- (4) 安居劔太郎「王女の誕生日」(『歌劇』第70号、歌劇発行所、1926年1月)、p.26.
- (5) *The Complete Works of Oscar Wilde*, p.247.
- (6) 安居劔太郎「王女の誕生日」、p.52.